

デジタル腹診計を用いたアトピー性皮膚炎における 胸脇苦満の数値的評価と柴胡剤による治療に伴う変化

○宮本 康嗣¹⁾、寺師 碩甫²⁾、沖田 極³⁾

山口大学・医学部・先端分子応用医科学講座・生体防御機能学¹⁾、銀座・玄和堂診療所²⁾、
山口大学・医学部・先端分子応用医科学講座・消化器病態内科学³⁾

〔目的〕

我々は新規開発のデジタル腹診計(digital abdominal diaphragm: DAD)を用いて漢方的腹診の数値化を試み、胸脇苦満(季肋部の強い緊張ないし抵抗)も数値的に解析することができ、アトピー性皮膚炎(atopic dermatitis: AD)患者においては全例が胸脇苦満ありと判定され、そのうち3名については柴胡剤の治療効果に伴う変化も観察し得たので報告する。

〔対象および方法〕

山口大学医学部附属病院、宇部市尾中病院、福岡大学病院の漢方外来を受診したアトピー性皮膚炎の患者9名につき、右季肋部の胸脇苦満を手によって観察、またデジタル腹診計にて測定し、従来のデータとの比較を行った。デジタル腹診計は指先を季肋部に潜り込ませる要領で、機器の先端部プローブを右乳頭と臍を結んだ線が肋骨弓と交わる部分の腹部側に当て、患者の呼気に合わせてプローブが2cm沈んだ時の圧を記録した。うち3名については柴胡剤を用いた際の胸脇苦満の変化も観察した。

〔結果〕

新規開発のデジタル腹診計(digital abdominal diaphragm: DAD)を用いた場合、胸脇苦満の有無は宮本の基準によれば1500g(寺師の基準では1300g)を閾値とすることができ、さらに2000g以上の場合には強い胸脇苦満あり、と判定された。3名のAD患者については荊芥連翹湯、加味逍遙散、柴苓湯を用いた際の症状所見の改善に伴い、季肋部の圧の低下が認められた。

〔考察〕

ADにおいては胸脇苦満が強い例が多く、これはADが慢性肝炎などと類似の慢性炎症性疾患であることを考えれば理解しやすい。ADにはさまざまな種類の漢方処方が用いられるが、胸脇苦満は柴胡剤適応の一つの指標であり、柴胡剤を用いることで症状所見の改善に伴う胸脇苦満の低減が認められたことは、ADの治療に柴胡剤が有効である場合があり、それは本DADを用いることで、胸脇苦満の数値的变化として把握することが可能であるだけでなく、治療効果の判定も可能であることを示唆するものである。このことから、本機器は漢方診断における腹証のEBM化にも寄与しうることが示唆された。